ありがとう貯金箱

つくも　みき

作品にこめたおもい

　自己肯定感とは、自分と同時に相手を思いやる気持ちから生まれてくると思います。そして人は、人の役に立てた時、強く自分の存在意義を感じることができるのではないでしょうか。
　私は『ありがとう』ということばが大好きです。何気ない一言で人の心は傷ついたり、癒されたり、幸せになれたりします。このことばがもっともっと広がって、自分や周りの人みんなを大切にする心が広がることを祈ってこの作品を書きました。

原作

ハルは、自分のことがとってもとっても大嫌いな女の子です。人の前に立つと胸がドキドキして、顔がりんごみたいに真っ赤になります。そのせいか、今日も先生に当てられた時、もじもじして答えられませんでした。それに、階段で転んで、みんなの給食をひっくり返してしまいました。
こんな失敗ばかりのハルは、
「どうせハルなんか。」
が口ぐせでした。

そんなハルを見て、お母さんは心を痛めていました。しかし、ある日、ハルにすてきなプレゼントを思いつきました。
それは、『ありがとう貯金箱』。
この貯金箱はふつうの貯金箱とは違っていて、お金をためるのではありません。だれかに『ありがとう』と言ってもらったら、紙に『ありがとう』と書いて貯金箱にためていくのです。
「ありがとうをいっぱいためたらね、とってもすてきなことがおきるんだよ。」
とお母さんは言って、ハルにわたしました。
『ありがとう』なんて言われたことがないハルはどうしたら良いかわかりません。

貯金箱は、何日たっても空のままです。
「どうせハルなんか。」

そんな日が続いたある日のことでした。学校からの帰り道、手押し車のタイヤが道路の溝にはさまって動けなくなって困っているおばあさんに出会いました。
「どうしよう。」
そう思ったハルでしたが、体が勝手に動き、手押し車をグッと押して、動かせるようにしてあげました。
「ありがとう。」

おばあさんは、とっても嬉しそうにそう言って向こうの通りまで歩いて行きました。
ハルの心が、そのことばを聞いた瞬間ぽわんと温かくなるのを感じました。家に帰ってさっそく、紙に『ありがとう』と書いて、小さく折りたたみ、貯金箱に入れました。
「『ありがとう』ってすてきなことばだな。」

次の日から、ハルはどうしたら、ありがとうと言ってもらえるか、みんなの役に立てるかを考えるようになりました。
「お母さんのお仕事手伝ってみよう。」
　　『ありがとう』
「友だちが消しゴムを忘れたから貸してあげよう。」
　　『ありがとう』
「久しぶりにおばあちゃんに電話してみよう。」
　　『ありがとう』

いつの間にか貯金箱はいっぱいになっていました。
「そうだ、もう一度、ありがとうを読み直してみよう。」
ひとつひとつのありがとうを思い出しながら、声に出して読んでみました。
「ねっ、ハル。貯金箱がいっぱいになったらすてきなことがおこったでしょ。あなた最近、どうせハルなんかじゃなくて、『ありがとう』が口癖になって、とってもすてきな女の子になったわね。」

ハルは、そのお母さんのことばを聞いて、とっても嬉しく思いました。そして自分が変わっていることに気がつきました。
「もう、どうせハルなんかなんて言わない。」
「自分のことも、私の周りにいてくれるみんなのことも大切で大好き！。」
すてきなことば『ありがとう』が、今日もあちこちから聞こえてきます。